

□ 本学の沿革

図書館情報大学は、一九七九（昭和五十四）年十月に開学し、いまだ十六年の歴史しかもたない新しい国立大学である。しかし、その淵源をたどれば、一九二二（大正十）年、文部省の中に設置された図書館員教習所にゆきつく。この教育機関の使命は、当時の図書館界の要望に応じて、全国各地に施設供給されつつあった公共図書館、大学図書館等に対して、分類・目録その他の図書館に固有の専門的知識技術を修得した図書館員の卵を育成し、これを提供することにあつた。戦前わが国唯一の常設的図書館員養成機関であつた図書館講習所（一九二五年に名称変更）は、戦後になつて帝国図書館附属図書館職員養成所として復活するが、帝国図書館が国立国会図書館に引き継がれることにともない、まもなく文部省社

会教育局に移管された。その後、図書館員養成所は、一九六四（昭和三十九）年に図書館短期大学（東京都世田谷区）と装いを改め、一九七九（昭和五十四）年に四年制大学に昇格し図書館情報大学（茨城県つくば市）となつた。

□ 大学院と図書館情報学

図書館情報大学は、学部が完成した後、一九八四（昭和五十九）年四月、ただちに大学院図書館情報学研究科修士課程を開設した。第一期生は入学定員十六名（これは現在も変わっていない）のところで、十四名が入学を許された。学部からの内部進学者が四名、他大学の卒業生が十名で、社会人入試の形態をとるものはなかつたが八名がいわゆる「社会人」の実質を備えていた（本年度から社会人入試が実施されている。私もその八名のうちのひとりであり、その頃「助手よりも院

生の方が平均年齢が高い」と言われていたことが思い出される（出身大学、学部での専攻分野、国籍など、院生の多様な構成は、現在にいたるも維持されている）。それから十一年、図書館情報大学大学院から巣立った人材は百二十三名を数える。

本大学院学則には、「図書館情報学に係る高度の理論とその成果の応用技術について教育研究を行い、もつて図書館情報学の深奥を究め、学術文化の進展に寄与する」（二条）ことを任務とする旨、うたつてゐる。それでは、「図書館情報学」というのは、どのようなことを研究する学問分野なのだろうか。これについては、権威ある定義があるわけではない（ほとんどの学問分野では、法学、医学、物理学、農学というように「研究対象＋学」という形の複合語となつていて、大方の共通理解が得られるのに対して、哲学（「さ哲らずの学」）ほどではないにし

ても、われらが「業界」は語をバラすと「図書館+情報+学」となり、誰にも共通のイメージを持ちうるるとは言いがたい)。もつとも、今日の図書館情報学(Library and Information Science)の系譜をさかのぼると、一九世紀初頭のドイツ、シュレティンガー(Martin W. Schreinger)の図書館学(Bibliothekswissenschaft)にゆきつく。アメリカでは、Library Scienceとか Librarianship とか呼ばれたものがこれに相当し、図書館実務の理論化とその改善方策の提示をその内容とする。アメリカにおいて、一九五〇〜六〇年代になり、膨大な、しかも急激に増大を続ける、しかし単純な構成をもつ書誌情報の処理に悩む図書館の現場が、にわかに関発された電子計算機のアプリケーションの場としていちはやく餌食となり、「図書館情報学」という言葉が使われるようになる。かつての図書館学は、コンピュータとの親和性が極めて高かったのである。ということは、歴史

の流れにそって言えば、従来、「図書館学」と呼んでいたものが新しい動きを抱え込んで「図書館情報学」と看板を書き換えたことが分かる。私人の理解にしたがえば、図書館運営にかかわる基本的考え方を中心としつつも、資料の選択・発注、分類・目録などの資料組織化、蔵書管理、貸出・返却、参考業務などにコンピュータ等の情報通信機器を活用する方策を探究することこそが、図書館情報学の中味なのである。電子図書館とかデジタル・ライブラリーとか呼ばれるコンセプトも、この延長線上にある。

#### □ 大学院の教育サービス

現在のところ修士課程のみをおく図書館情報学大学院は、図書館情報学専攻という一専攻のなかに、図書館情報基礎論、情報認識論、情報構成論、情報社会関係論、情報媒体論、図書館情報組織論、情報機器利用論、図書館情報検索論の八つの専門分野を擁し、院生は分野横断的

に二十二単位以上を取得する一方、いずれかひとつの専門分野を選択し、修士論文の作成に取組む。八つの専門分野は、それぞれ先に述べた図書館情報学総体の各側面をなすものであるが、大別して、図書館等の情報サービス機関の管理・運営に重点をおく社会科学的情報学と情報サービス機関の諸業務の効率化・合理化に資する各種情報システムの研究開発につながる内容をもつ工学的諸研究の二種を含むものである。学位も、発足当初は学術修士の一本であったが、現在はこれに対応して、修士(図書館情報学)と修士(情報学)の二本立てとなっている。院生に対する研究環境への配慮としては、アメニティ(快適性)の確保された院生室を提供することは当然のこととして、汎用計算機システムのほか、マルチメディアワークステーション、三次元グラフィックスワークステーションなどキヤンパスLANに接続された高度な各種情報資源を活用することができ、世界に

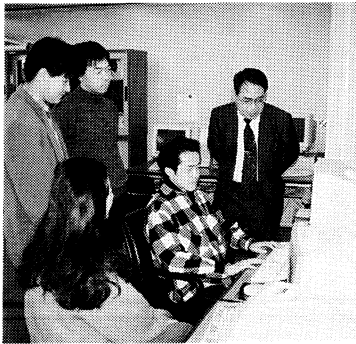
またがるネットワーク・サーフィンも自由に楽しむことができる。また、二十四時間マニアックに勉強したい院生のために、夜間・休日も研究棟に立入り勉強をすることができるといふほか、附属図書館で関係資料を閲覧することができるといふ教員に近い特権が付与されている。

### □ 大学院生の修了後の進路

手許に一期生から一昨年（一九九四年）三月修了した九期生までの「図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修了者一覧」というマル秘文書（プライバシーにかかわるため）がある。それによれば、一九九四年三月までに修了した者は百五名いるが、死亡者一名および帰国した外国人等把握できなかった者三十三名を除く七十一名の現職は、大学・短大の教員を含む研究職が二十名（二八％）、大学図書館・公共図書館などの図書館が十六名（二三％）、情報産業が十六名（二三％）、出版関係が三名（四％）、その他が十

六名（二三％）となっている。その他十六名のうち九名は、他大学の大学院博士（後期）課程などに進学し、現在なお在学中の者である。

この大学院修了者の進路を見て分かることのひとつは、教育研究職にもぐりこむ者の数がかなり多いことである。「オバードクター」問題が久しく取り沙汰されているわが国の大学院において、修士課程しかおいていないにもかかわらず、結果的に研究者としての道を歩む者が多いということとは、『大学教授になる方



（図書館情報大学 提供）

法」といふ書物がもてはやされる風潮にかんがみても、本学大学院の特色のひとつとなっている。（誤解がないようにひとつと申し添えておくと、希望者がいたとして、そのすべてが研究者になれるとは限らない。また、これは厳然たる事実であるが、修了後ただちに研究職に就く者もいるが、数年間の図書館実務等についた後、教育研究職に転出する例が多い。）

本大学院は、先の数字にもうかがえる通り、図書館や情報産業等にも有為な人材を供給しており、東京大学、京都大学、慶応義塾大学、愛知淑徳大学など、博士課程を擁する「同業他社」（中央大学が今年度から大学院に図書館情報学の専攻を加えた）と比較しても、「業界」において特異な位置を占めている。

いうまでもないが、本稿において意見にわたるところは、筆者個人のものであることを断っておく。

（やまもと・じゅんいち）